様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３４７２

研究課題名（和文）戦争を体験した人のライフストーリー～複合的外傷体験としての学童疎開～

研究課題名（英文）Evacuated school-children suffered compound post-traumatic stress disorder

研究代表者
出口　禎子（deguchi, sachiko）

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：００２６９５０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：太平洋戦争時に学童疎開をした11人の高齢者に当時の生活状況について聞き取りを行い、その戦争体験が後の人生に与えた影響について考察した。当時10代だった人も今は80代である。当時のいじめ、慢性的な空腹感、寂しさの実態が明らかになり、戦時中の怪我の後遺症や友人の死を目撃した記憶に悩まされ続けているケースもあった。今回の調査では戦争孤児の状況も明らかになった。沖縄は壊滅状態にあったが孤児院が建てられ保護された子供が多かった。一方本土では浮浪児となって生き抜いた子どもが多く、大人の繰り返される裏切りの中を生き抜いてきた。その経験に口をつぐんできた彼らも、戦後70年が過ぎ少しずつ語り始めようとしている。

研究成果の概要（英文）：We have interviewed eleven (11) people who had experienced evacuation during World WarⅡ. Based on this interview, we have analyzed the effect of such war-time experience caused to them for the rest of their life. They were teens during the war, but they are in their 80s now. They have experienced bullying, continuous hunger and loneliness. Some of them have been troubled by aftereffect of injury or memory of witnessing their friend's death.
In this study, war orphans and their lives were also unveiled. Although Okinawa prefecture was completely devastated after the war, many children were safely accommodated in orphanages and were cared. On the other hand, many orphans were deserted in the mainland and were often betrayed by grown-ups, but somehow they had managed to live through. Until recently, they were silent, but finally 70 years after the war, they began to tell his stories.

研究分野：精神看護学

キーワード：学童疎開　太平洋戦争　戦争孤児　沖縄線　集団生活　PTSD(トラウマ)

１．研究開始当初の背景

日本では太平洋戦争の末期である昭和 19 年から 20 年にかけて、国の大事業の施策として学童疎開が実施された。学童疎開とは、「次代の国民としての学童の命を守り…大人が国土防衛と生産に十分働くためのものであり…」（週報 406 号、407 号）と説明されている。本土では東京、川崎、大阪、神戸、名古屋、広島など大きな都市に住んでいた子どもたちが対象であり、当初は原則として縁故疎開がすすめられていた。しかし昭和 19 年には「学童疎開促進要綱」をもとに、縁故疎開先がない国民学校初等科の 3 年生から 6 年生に集団疎開が進められるようになった。疎開には縁故疎開と集団疎開があり、さまざまな理由で残留した人もいるが、その中には、国の施策に従わない「非国民」と非難された人もいた。また縁故疎開は近親者同志であるが故の複雑な禍根を残し、現在まで関係を修復できていないというケースもある。

疎開政策が実施された期間は 1 年数カ月間という短い期間であったが、この短期間に 58 万人以上の子どもたちが、住み慣れた家庭を離れ見知らぬ地で集団生活をしたと言われている。ただし、この人数が公的に発表された資料はなく、各都道府県の数字を推計した人もいない（星田 1994）。疎開地や疎開場所、付き添った大人との関係などによっても、子どもたちの日常生活の状況は違った。その実態は学童疎開の体験者による体験記や疎開地や疎開人数、疎開に伴う費用など統計による調査資料を通して概要を知ることができる。しかし一方で、個人の戦争体験という視点から集団疎開の生活の実態を明らかにし、戦争体験の意味やその後の人生への影響について調査したものはほとんどみあたらない。私たちは過去 15 年間にわたり、関東圏に住む疎開を体験した高齢者に、当時の状況を聞き取り、戦争体験が後の人生に与えた影響について考察してきた。当時 10 代だった人たちも今は 80 代になっている。すでに亡くなった人も病気の人もおり、体験者から直接語りを聞くことのできる機会はそれほど残されていないと考え調査を進めてきた。聞き取りの結果から学童疎開をした多くの子どもたちが、「いじめ」、「慢性的な空腹感」、「寂しさ」という共通の体験している実態が明らかになった。さらに調査を続けていくうちに、疎開中に負った怪我の後遺症や友人の死を目撃したという記憶や固有の体験に戦後 70 年近く過ぎた現在も悩まされ続けているケースがあることがわかった。また戦争で親を亡くし、孤児として生きのびた戦争孤児の中には、疎開中よりも戦後の方が辛かったと語る人もおり、学童疎開中の体験だけに焦点をあてるのではなく、疎開前後に起こった出来事も知る必要があると考えるようになった。今回の調査では新たに 11 人の高齢者を対象に、疎開中の生活および疎開前後の出来事について聞き取り調査を行った。

２．研究の目的

太平洋戦争時、学童疎開を体験した人に疎開生活と疎開前後の出来事について聞き取り、その実態を明らかにするとともに、その体験が後の人生に与えた影響を考察する。

３．研究の方法

研究参加者は、日本疎開学童協議会、戦争孤児の会、野尻会（沖縄県）から紹介を受け、研究の主旨に同意を得られた方 11 名である。現在 80 代と高齢であるため、体調を考慮し相談しながら面接の日時と場所を決定し、1 回 2 時間程度の聞き取りを 1－3 回行った。本人の了解を得て聞き取りの内容を録音した。聞き取り内容をもとに逐語録を作成し、エピソードを抽出してカテゴリ化した。次にこれらのカテゴリの意味する内容と人生に与えた影響について考察した。研究組織のメンバーで収集した情報の読み合わせを繰り返し行い、テーマごとに体験の意味と人生に与えた影響について考察した。

質問内容は以下の 3 項目を設定し、その他、疎開前後の個有の体験を１対１の対話形式で自由に語ってもらった。ただし研究参加者 11 名のうち 2 人の人は、一人で語る自信がなく付き添いを希望したため、体験者 2 人と研究者一人の面接で聞き取り調査を行った。

①疎開生活の概要（疎開地、疎開場所、一日の生活、対人関係など基本情報）
②学童疎開前後の主な出来事
③それらの体験が戦後の人生に与えた影響、この他、聞き取り以後に手紙などで知りえた情報も本人に了解を得て調査資料とした。

４．研究成果

語りの対象となった研究参加者は 80 代の女性 7 名、男性 4 名の 11 名である。本土では都市に住む子どもたちの疎開地として、軍事工場や空軍基地が少なく、比較的空襲の可能性が低いであろうと思われる田舎の地方が選ばれた。一方沖縄県では九州が主な疎開地として選ばれ、中でも特攻基地や軍港のある場所を避け、宮崎県や大分県などに多くの子どもたちが疎開した。しかし沖縄から九州へ移動するためには「学童疎開船」に乗り航海しなければならなかったため、疎開地への移動そのものが命がけであった。

このように、疎開地への移動から疎開中の日常生活に至るまで学童疎開に関わる体験は実にさまざまであり、親しい人の死を目の前で目撃したり、戦争孤児となり浮浪児と呼

ばれながら生きぬいてきた人など、逐語録には収めきれないほど多様である。自分だけが生きのびたという「罪悪感」を抱えて生きている人も多かった。戦後 70 年経った現在も、苦しい戦争体験と折り合いをつけながら生きている人、語りながら話せなくなってしまう人もいた。

1)戦争中に親しい人の死を目撃する

疎開した土地で東南海地震に遭い目の前で仲間の死を目撃した体験者は、戦争が終わった後もずっと自分が生き残った罪悪感に苦しみつづけていた。また東京大空襲で母親と姉妹を同時に亡くした人や地上戦である沖縄戦で目の前で親や兄弟の死んでいくのを目撃した人は、辛い記憶が甦ると言いインタビューの途中で語れなくなった。ハーマン(1992/ 1997)は罪悪感が特に激烈となるのは、生存者が自分以外の人間の苦しみ、特に死の目撃者となった時であると指摘しているが、仲間の死を目撃した人は、「何年も亡霊に怯えた」と語り、自殺を図ったこともあったという。その研究参加者は、現在もてんかんのような身体症状をもっていた。もともとてんかん症状は第一次世界大戦後には多く見られ、失神を伴う痙攣症候群であったことが知られている（Kardiner 1947／2004）が、今は服薬治療を受けて症状をコントロールしている。

さらに今回は沖縄戦を体験した人に語りを聞くことができた。唯一の地上戦であり、4 人に一人が犠牲になったといわれる沖縄戦の体験者には身近な近親者を亡くした人が多い。しかも家族のうち一人あるいは 2 人だけしか生き残らず、後の家族はすべて亡くなったというケースも複数あった。その人たちも島の南部に逃げる途中で敵軍に会い、退いてはまた進むという命の危険と隣り合わせの緊張した時間が続いた。また前述したように沖縄の疎開地には九州が選ばれたが、学童疎開船が疎開地にたどり着く前に米軍潜水艦によって撃沈される場合もあった。那覇から九州に向かった疎開船「対馬丸」では学童 775 人が犠牲になっている。この船は撃沈されたため、ほとんど遺留品は残っていないが、痛みと共に対馬丸の出来事を記憶している体験者は多い。本土か沖縄であるかを問わず、また直接、犠牲者を知らないという人たちも、対馬丸を思う時には、自らが「生きのびた罪悪感」を伴いながら語っていることが窺えた。

2)戦争孤児として生きのびる

昭和 23 年に行われた、当時の厚生省による「全国孤児一斉調査」によると、太平洋戦争中に 123,511 人の孤児が生み出され、この中で施設に収容された人は 12,202 人だけである。100,000 人以上の子どもが孤立無援の状態で社会に放り出されたのである。施設の不足や施策の不備が指摘されているが、施設に保護されなかった孤児たちは、本人たちの語りによれば、「身売り」をさせられたり、「浮浪児」として生きのびるしかなかったのである。学童疎開の体験者の中には東京大空襲で家族を全員亡くし、疎開地にいた自分だけが助かり戦争孤児となった人も多い。また子どもとしてその過酷な現実に直面できないままに、続いて縁故疎開をした人もいた。さらに、困窮した親戚や恩師に頼ったものの、身近な大人から度重なる裏切りにあうなどの外傷体験を重ねてきた人もいた。このように太平洋戦争により戦争孤児となった人たちは、死の不安や飢餓感などの生命の危機に加え、10 歳そこそこで保護者のいない孤独で実に凄惨な人生を生きることになった。追いつめられて生き抜く中で、盗みなど反社会的な行動に走ったこともあった。その後ろめたさを抱え続け、戦後も長い間、堅く口を閉ざしてきたという。義務教育すら受けられなかったことも彼らにとっては「学歴がない」という負い目につながった。戦争孤児の会では、同じ体験をした同志でその体験を共有し伝えて行こうと名簿つくりを目指したが、居所を知らせてくれる人は少なく、繰り返し問いかけても拒否されることが多かったという。消息不明となっている人も多く、当時の孤児が今どこに住み、どのような生活を送っているのかを把握するのには困難を極めたという。しかし最近では病気や亡くなる人が増え、このままでは戦争孤児の体験はなかったことになってしまう、孤児の歴史を抹殺してはならないという危機感から、きちんと聞いてくれる人がいるなら「真実を語ろう」と話し合っているという。

さらに今回は、沖縄県で調査を行う機会を得、沖縄戦の体験者の話を聞くことができた。状況は本土と異なるが、沖縄戦では唯一の地上戦が繰り広げられ、機銃掃射や集団自決などによって住民の 4 人に一人が亡くなった。その結果、多くの戦争孤児が生み出された。終戦直後の沖縄は壊滅状態にあったが、孤児院用のテントが建てられたり、個人の家で親を亡くした子供を引き取るなど保護された子どもも多かった。この結果から浮浪児を多く生み出した本土の戦争孤児の体験や当時の処遇を比較し違いを少し知ることができた。地域や文化が違えば状況は変わる。本土と沖縄の終戦直後の状況を理解し比較するにはさらに調査を継続する必要がある。今後は調査対象の地域を広げ、戦争体験者の語りから、高齢者の健康や生活と戦争体験との関連を見ていきたい。

3)学童疎開中に負った傷の後遺症に今も苦しむ

戦時中に負った傷が悪化し、現在もその後遺症に苦しんでいる人がいた。集団生活をしている時、靴が取り合いになり、残った靴が小さすぎて怪我をし、これが悪化して「ヒョウソウ」になった。しかし当時は「兵隊さんは闘っているのだから」と言われ、どれほど痛くても子ども心に「痛い」とはいえず、ずっと辛抱し隠し通していた。我慢するのは当たり前だった。周囲がおかしいと気がついた時にはもう立つことができなくなっていたという。その後遺症が原因で、しゃがんで排泄することも体育の授業に参加することもできなかった。この足の傷はさらに悪化して11歳の時には「左股関節炎発症」の診断を受けることになった。現在も継続的に痛みがあり、定期的に神経ブロックの治療を受けている。また背骨が大きく曲がっていて左股関節は全く動かないため行動制限があり、日常的に不自由を感じている。疎開中のわずかな傷が、戦後の人生に大きな影響を及ぼしていることが明らかになったケースであった。このように現在に至るまで生活障害に関わる深刻な後遺症と共に生きている人もいた。

4)新しい人生を創出する

これまでの調査を通して、子どもの頃の戦争体験が想像以上に忘れ難い深刻な記憶として残っていることや、今も生活にさまざまに影響を与えているケースがある事が分かった。一般に生存者が死の不安と生き延びた罪意識から身を守るために示す反応は、感情の機能を停止することであると言われている。実際に多くの戦争体験者が、長い間、心を閉ざし、語らないことによって「内なる自我」を守って生きてきたのだろう。しかし長い間、語ることができず、さまざまな記憶に悩まされてきた体験者たちも、今ようやく外傷体験の教訓を人生に組み込む準備をし、自分たちの体験を語り始めているようにみえる。学童疎開の体験者や戦争孤児として生きのびてきた人の中には、「語ってもわかってもらえないから、語らない」と考えてきた人も複数いることがわかった。実際に「そんなことがあるはずがない、信じられない」という言葉を投げかけられ、戸惑ったという人もいる。しかし今だからこそ語らなければならない、体験者にしか語れないことがあるという広告塔としての役割を担ったり、戦後に出会った人たちの助けを得ながら新しい人生を創出しようとする人もいた。これは戦後70年の時を経て、ようやく犠牲を使命に変化させていく過程、精神的再形成（R.J.リフトン1968／2009）の段階に至ったと考えられる。今回の研究参加者の中には、戦時中の辛い経験をばねにして自分の生き方を立て直し、地域の民生委員として活動したり、ボランティア活動に参加するなど、自分なりに新たな生き方を創出している人たちもいた。

5)今後の展望

今回の聞き取り調査を通して、疎開地や集団のメンバー構成、身近な死の体験など、戦争体験は実に多様であることを再認識することができた。体験者自身の戦争体験の受け止め方もさまざまであり、戦後70年経った現在でも、戦争体験と対峙しながら生きている人や自分の体験の意味について問い続けている人もいた。今回、聞き取りに協力いただいた人たちは、自分の戦争体験を受け止め、やっと「語る」ことができるようになった人たちであり、それぞれの逐語録は長く語られることのなかった貴重な「市民の戦争体験」であった。

複雑な社会で生きる私たちもいつ非日常的な出来事に遭遇するかわからない。しかし、苦しい体験、辛い記憶を受け入れ、その経験をばねとする戦争体験者の生き方にそのヒントを学ぶことができるように思う。

医療に従事する者は、いずれ病院に高齢者を迎え、彼らの療養生活に接する機会が増えてくるであろうと思われる。私たちの想像をはるかに超える過酷な経験をし、今もその苦しさと闘いつづけている存在であることに思いを致しながら、高齢者にかかわりたいと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０　件）

〔学会発表〕（計　１　件）

①出口禎子、松本佳子

沖縄における子どもの戦争体験とその後の人生への影響～学童疎開体験者からの聞き取り調査より～

日本看護研究学会 第28回近畿・北陸地方学術集会、2015年3月7日、金沢大学、石川県金沢市

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

６．研究組織

(1)研究代表者

出口 禎子（DEGUCHI, Sachiko）
北里大学・看護学部・教授
研究者番号:00269507

(2)研究分担者

武井 麻子（TAKEI,Asako）
日本赤十字看護大学・看護学科・教授
研究者番号： 70216836